

フェア・トレードによる草の根支援活動改善に関する提案  
ーカンボジア手工芸品・衣料品生産者支援の事例からー

吉元由香

先行研究に取り組む以前に、本論文の筆者は、発展途上国の一つ東南アジア・カンボジアの、手工芸・衣類品生産活動を行なう現地 NGO にて、商品開発アドバイザーとして草の根支援活動を開始していた。

その NGO の生産者たちは主に、地雷・不発弾身体被害及び先天性身体障害を持つ者たちによって構成されていた。

彼らの生産品は通常、「第一世界」と称される先進工業諸国にて販売され、その生産及び実際の販売にまでかかる過程に「フェア・トレード」というシステムを活用させる場合がある。

このフェア・トレードという、民間有志により創案・構築された貿易システムは 40 余年の歴史を持つ。主に発展途上国(低開発国)にて紛争被害、自然災害、その他の自国内社会情勢の不安定さに晒され続け、生計自立に困難を来している人々を支援する目的で動かされている草の根支援活動のひとつである。

なおこの分野では、大きく分けて二つの分野に分けることができる——食品分野と手工芸・衣類品分野の生産・販売である。この両分野いずれの生産者も、自分たちの生産活動に結果的に降りかかっている不平等な生産活動や商取引(貿易)に直面している。

フェア・トレードは、こうした問題を抱える人々の生産活動を少しでも平等な位置に持ってくるための支援が目的となっている。

つまり、NGO等民間団体によるフェア・トレードという国際協力支援は、「第一世界」(先進工業諸国)から「第三世界」(発展途上諸国)へ向けられた、発展途上国の人々がよりフェアな生産・販売活動を構築するための活動なのである。

このような発展途上国のひとつであるカンボジアでの、筆者の草の根支援活動もこのフェア・トレードを活用させた生産・販売活動を実施していた。ところが、その手工芸・衣類品生産販売を行なっている生産現場の生産者たちが、最低限の「満足」さえ得ているようには見られなかったのである。別の言い方をすると、発展途上国の人々に対するフェア・トレードとは、本当の意味での支援活動になっているのか否か、現地活動を行なう筆者の中で疑問が出てきたのである。

本論文にて、筆者は次の疑問と実際のフェア・トレードの動きを考察することにした。

「なぜフェア・トレードにこのような疑問が、そして何がこの生産活動の現場に起きているのか？」

「何がこのフェアトレード活動の障害になっているのか？」

「どのようにこの問題を解決に導くことができるか？」

「フェア・トレードを通じた活動の長所(利点)と短所(不利)は何か？」

「全体の動きとしてどのように事態を向上させることができるか？」

発展途上国(低開発国)であるカンボジアの手工芸・衣類品群類に該当の生産活動を事例の対象とし、フェア・トレード活動への疑問と改善提案に向けて、本論文で議論を試みる。

はじめに

序章

- 本論文の問題意識
- 本論文で扱った先行研究

第1章 《フェア・トレードへの取組み》

- 1-1 フェア・トレード発足の背景
- 1-2 フェア・トレードの機能性
- 1-3 フェア・トレードの二極性

第2章 《現在のフェア・トレード事情(マネージメント重視)》

- 2-1 フェア・トレードの変革
- 2-2 現在のフェア・トレードとその全容

第3章 《フェア・トレードへの問題提起》

- 3-1 現在のフェア・トレードへの疑問①
  - マネージメントとは？
- 3-2 現在のフェア・トレードへの疑問②
  - なぜ手工芸・衣料品の生産・販売か？
- 3-3 フェア・トレードによる手工芸・衣料品の生産・販売マネージメントの盲点

第4章 《フェア・トレードへの提言》

- 4-1 フェア・トレードによる手工芸・衣料品の生産・販売マネージメントへの提案
- 4-2 発展途上諸国における手工芸・衣類品群フェア・トレードのマネージメント

結論

- これからのフェア・トレード

本論文は、大枠でフェア・トレードを取り扱った。その中でも対象とされる発展途上国(低開発国)であるカンボジアを事例とした。更に、フェア・トレード活動には大きく分けて「食品群」と「手工芸・衣類品群」と、二つの枠に大別して捉えることができ、尚且つ対象国のカンボジアでは後者のフェア・トレード活動が盛んなことから、「発展途上国カンボジアにて、フェア・トレードを介した手工芸・衣類品群の生産・販売活動における疑問と改善提案」を、本論文全体の議論対象としている。

フェア・トレードとは全世界において、概して一般大衆(消費者)に対し「良い印象」を与えている。その活動が発展途上国で生計自立に困窮している人々を支援することを目的とされる民間発の国際協力活動として、その価値観が享受されているからだ。

ところが、実際のその草の根支援活動現場で状況を見ていた筆者は、フェア・トレードそのものにいくつかの疑問を覚えるようになったのである。簡単に言ってしまうと、発展途上国(本論文での対象国はカンボジア)でのフェア・トレードを介した生産販売活動を行なう生産者たちが、「幸せ」には見えなかったのである。

本論文においては、(論文執筆開始以前の筆者自身も含め)世間に漠然と知れ渡っている「フェア・トレード」というものが、実際にはどのような背景を持つ活動なのか、実際にどのような活動が行なわれているのか、発足から現在までその背景の中にある変遷にはどのような変化があったのか、具体的に誰が対象とされる支援策なのか、この支援の対象となった発展途上国(カンボジア)の人々にどのような効果と貢献がもたらされているのか…等々、まず論文の前半で、発足当時から現在までのフェア・トレードの全容とその変化の動きについて、主に文献を通じながら見ていく。

後半部では、これまで変化を遂げてきた現在のフェア・トレードの体制について、筆者自身の疑問を考察していく。そして、その疑問に答えるための事例を、筆者自身の草の根支援活動と、後のカンボジア現地での聞き取り調査を基に、筆者からの提言として結論に帰着させた。

まず序章では、本論文での筆者自身の問題意識と取り扱った先行研究について論述を行なった。また、フェア・トレードが発案されたその背景を、筆者自身の草の根支援活動の体験と共に、ここで簡単に振り返ってみた。

次に第1章では、フェア・トレードへの取り組みは実際にどのように行なわれているのか、といったその機能性や体制の二極性について、文献の記述を基に考察を試みた。フェア・トレードが世界の発展途上国で必要とされるようになったその理由は、現在までの世界時流に並行して遅かれ早かれ(恐らく必然的に)発足が必要だった、改めて見直された世界貿易の現状の中にあった。もう少し簡単な表現を用いるならば、フェア・トレードとは「世界の発展途上国で貧困に苦しむ人々の、世界貿易を介した救済支援活動のひとつ」、と言える。この考えを基に、世界各地(当初は主に欧米諸国にて)そのフェア・トレード活動団体の数が増えだし、現在までに凡そ半世紀という時間をかけて、自分たちの経済社会で実用化してきた草の根民間発の新たな世界貿易の姿になった。

第2章では、変貌を遂げた現在のフェア・トレードの姿について、従来のやり方から何が、どのように変わってきたのか、またそれがなぜ必要になってきたのかについて、第1章から引き続き、文献を基に論述を試みた。この章で注目をしたのは、一昔前では余り積極的には取り込まれず、支援を受ける発展途上国側生産者及びその団体に要求されるようになった「マネジメント」についてである。従来のフェア・トレードは、慈善的事業による支援体制が主だった。時代が進み、貿易を含む世界経済の内容も徐々に様変わりをしていくと、フェア・トレード自体の貿易・商業体制も、その変化に対応していかななくてはならなくなった。本章からは特に、フェア・トレードの中でも手工芸・衣類品群に該当のそれを重点的に見ていった。

第3章では、フェア・トレードから見えてきた疑問に迫る。発足当初から変容を遂げてきた現在のフェア・トレードには「マネジメント」が必要である、というのが目下の筆者の主張だが、その主張するマネジメントにもいくつかの疑問点が浮上した。

ひとつの例として、「現在のフェア・トレードに対応するマネジメントの本当の役目とは何か？」ということについて、である。これまで確かに、フェア・トレード活動に費やされた経費や業績などの情報を公開することにより、より広く多くの消費者にその活動の実態を理解してもらい、国際協力へと繋げるために必要とされるそのマネジメントだった。しかし現在のフェア・トレードには、単に支援者側(先進諸国側)がリードする形でマネジメントに注視するだけでなく、貿易という形を利用して、先進国のフェア・トレード支援者側と商取引を行なう発展途上国側の被支援者側にも、同様のマネジメントへの理解と実践が必要とされるようになってきた点に注目した。

もう一つの例として、フェア・トレードとして取り扱われている商品の中では恐らく最も小さな枠の、フェア・トレードにおける貿易取引に該当する手工芸・衣類品群が、それでもなぜこの取引にて注目されているのか、問題として探ってみた。この群類に該当する商品を扱う発展途上国の生産者たちは、自国内独特の因習的社会背景を抱えている場合が多い。噛み砕いて言うと、国際標準の「人権」問題にもかかる事例だろうか。この枠に該当する生産者にとって、生計自立への最も確実な道が、このフェア・トレードの手工芸・衣類品群に当たる生産活動になっていた。ところが、そういった複雑な背景によってフェア・トレードの「手工芸・衣類品」群に該当の生産活動を行なったとしても、その時点でマネジメントにおける再び新たな疑問が生じてきた。現在のフェア・トレードにおいて、その「マネジメント」は支援側及び被支援側双方に必要とされることは明らかなのだが、お互いに曲解した理解と実用をしてしまうと、「フェア・トレード」そのものが根幹理念「不公正貿易の是正」を目指した最も望ましい形での実用化には繋がらなくなってしまう危険性がある点を、この章末で注目した。

最後の第4章では、前章で見てきた疑問点を踏まえ、それでは「現在のフェア・トレードに必要とされているマネジメントとは何か？」について、筆者の現地での草の根活動と後の聞き取り調査からの回答と共に、提言を述べた。

とりわけ聞き取り調査の結果から、筆者の結論を導き出すことができた。つまり「現在のフェア・トレードにおけるマネジメントの重要性」について、である。このマネジメントの有効性を適切に理解し実践している団体のフェア・トレードは、先進国の支援側と発展途上国の被支援側双方で優良な関係であるパートナーシップを構築し、その関係を持続へと繋げることができていた。その反面、上記にある有効性を正しく理解できず実践に繋げることに困難を生じさせている団体は、これも先進国の支援側と発展途上国の被支援側双方において、フェア・トレードを通じた商取引そのものに何かしらの障害を覚えていた。

以上の議論から、早い段階から仮定していた筆者の結論に対する論証を、「これからのフェア・トレードのあり方」という提言で、最終的に結論へと導き出すことができた。この提言は、先進国の支援側にも発展途上国の被支援側双方に熟慮願いたい点であり、フェア・トレードの当初からの目標である「不公正貿易」の是正に繋げていく事が望まれる。

(了)